

表現運動の指導実践を促す大学時履修内容の検討[†]

—小学校教科「体育A」3回の実践から—

茅野 理子*

宇都宮大学教育学部*

本研究の目的は、教員養成課程における小学校教科の3回の実技において、指導への意欲や指導力はいどの程度体得できるのかを検討することであった。その結果、以下のことが考察された。ダンス（表現運動）に対する意識及び指導意欲は授業前よりも授業後の方が有意に高まった。印象に残った授業内容は、表現領域の内容が高い評価を得た。体得した指導技術についての自己評価は、「リズムに乗って動くことができた」と「自分で動いてみせることができた」が上位にあり、この2つが指導意欲に関連していると示唆された。

キーワード：表現運動、動機づけ、指導意欲、実践的指導力、教員養成課程

1. はじめに

ダンス指導実践に関する先行研究である「大学専門教育改善のための現職教員のダンス指導実践に関する調査研究」（舞踊研究会プロジェクト研究、1994）では、小中高教員を対象とした全国調査を行い、実践的指導力を形成する3要因（大学時履修経験、教職経験、環境要因）のうち、履修経験は、「ダンス観、指導観、指導能力などに影響を与え、指導実践をおこなわせる原動力になる」（p.9）ことを指摘し、1年以上の履修期間が有効であると示唆している。

一方、平成10年の指導要領改訂により中学2年までのダンス必修化に伴い、様々な調査が県単位でも報告されているが、それに関わる主要な先行研究の一つとして、村田（2010）は次の指摘をしている。

- ・必修化実現のためには、その意味や取り上げる内容の特性について、教員の理解と意識が必要。
- ・踊るという行為を通して、「コミュニケーション能力」が得られると考えている教員が多く、必修化になることで、特にこの点に期待が寄せられている。
- ・ダンスの必修化に対する教員の意識は、「生徒

には良いことだが、教員には負担」という考えが大半を占めており、教員の確かな指導力を獲得するためにも、誰でも気軽に参加してダンスの楽しさを研修できる機会を望んでいることが明らかとなった。

また、中村（2009、2010）は、ダンス授業の変容と展望として、採択ダンス種目は、現代的なリズムのダンスが最も多いが、既成の動きの習得学習を中心に実施している学校も少なくない。また、学習の質が十分確保されているとはいえず、多くの教員がダンス指導法や指導力養成の必要性を感じているが、教員のダンス指導研修・教材研究はあまり進んでいないことを指摘している。

中学校2年生までのダンス必修化を考えると、小学校期にダンス（表現運動）を好きにさせておくことが肝要であり、そのためにも小学校教員の実践的指導力は重要になってくる。

そこで、本稿では、3回の授業実践を通して、ダンス観や指導意欲に変容はみられたか、体得できる指導技術とそうでない指導技術とはどのようなものか、授業内容が指導意欲にどのように関連しているのかを明らかにすることで、有効な実践的指導力の修得についての基礎資料を得ることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象

平成28年度本学部小学校教科専門「体育A」を受講し、調査の趣旨に賛同し協力を得た受講生を対象

[†] Masako CHINO*: Examination of the Factor to Motivate the Practical Instruction of the Expressive Movement.

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: chinom@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

象とした。分析対象数は、データに欠損のなかった授業前123名（男子51, 女子72）、授業後148名（男子68, 女子80）である。

(2) 調査時期

調査は表現運動の授業前（以下Pre）、授業直後（以下Post）の2回実施した。

(3) 調査内容

①授業前：性別、体育・スポーツ及びダンスに対する意識、ダンス経験、表現運動指導への意欲

②授業後：性別、本授業で印象に残った内容、体得できたと思う指導技術、表現運動指導への意欲

調査内容は、松本、高橋ら（1994）の調査に準拠し、予備調査を踏まえて新たな項目を補足した。

(4) 統計処理

集計はIBM SPSS Statistics Version 24で行い、分析はクロス集計とカイ2乗検定を行った。

3. 結果及び考察

(1) 授業内容について

3時間の授業構想では、学習内容であるリズムダンス、表現、フォークダンスの3つに触れながら、それぞれの典型教材を実践することで、1時間の授業の流れを認識できるようにしている。各時間の目標は以下に示すとおりである。

①リズムダンス・フォークダンスの指導

②ひと流れとひとまとまりの指導－表現の指導を中心に－

③表現リズム遊び・表現運動の模擬授業－低・中・高学年の指導の原則－

(2) ダンス経験について

これまでのダンス経験を表1に示した。

表1. これまでのダンス経験

	小学校	中学校	高校
経験無	28 (18:10)	29 (25:4)	61 (38:23)
経験有	95 (33:62)	94 (26:68)	62 (13:49)

() 内数字は、(男子, 女子)を示す。

この結果からは、明らかに女子の方が授業等でダンスを経験している割合が高いこと、男子は中学校では半数近くがダンスを経験していないこと、高校になると男女共に経験有と無が半々であることが認められる。

また、経験内容を見ると、授業ではなく、運動会や体育祭が多い。小学校では、6割強が運動会での経験のみと回答した。これは、20年前の全国調査で表現運動の指導をしたと回答したのが5割であっ

たことと同様の結果である。自由記述を見ても、「ダンスの授業はほぼやったことがなかったの」（男子）や「表現運動は運動会でしかやったことがなかった」（女子）ことから、表現運動の授業がどのように展開されるのかがイメージできない学生が多いことが示唆された。

(3) 授業を通したダンス観や指導意欲の変容

授業後、ダンスに対する意識が変わったかどうかについては、嫌いなままで終わってしまった学生が11名いる（148名中）。約1割を変えられなかったことになる。

また、好きから嫌いに変わったと回答した者が2名いるが、指導意欲については、「やってみたい」「できればやってみたい」と答えており、回答に対しての疑問が残る。

図1及び表2は、授業前と授業後の表現運動についての指導意欲を比べたものである。

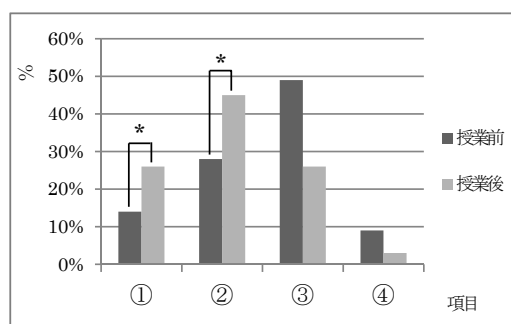


図1. 指導意欲の変容 *p<0.05

表2. 指導意欲の変容 (①～④は図1に対応)

	授業前	授業後
①やってみたい	17(14%)	38(26%)
②できればやってみたい	35(28%)	67(45%)
③あまりやりたくない	60(49%)	38(26%)
④やりたくない	11(9%)	5(3%)
合 計	123(100%)	148(100%)

指導意欲は、授業後、有意に高くなっている。

自由記述からは、「難しそうだなと思っていましたが、夢中でやっていました。ただ体を動かすだけでなく、考えたり、協力したりするところにおもしろさを感じました」（男子）とあり、実際に動いてその意義を体得できたことが指導意欲につながったのだと推察される。

(4) 指導上不安に思っていること

授業前に回答を得た「指導上不安に思っていること」を図2にまとめた。最も多いのが③「助言の仕

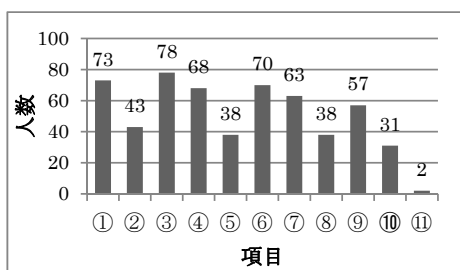


図2. 指導上、不安に思っていること

- ① 授業の流れ ② 学習内容 ③ 助言の仕方
 ④ 評価の仕方 ⑤ 自分にリズム感がない
 ⑥ 自分で動いてみせられない
 ⑦ 自分で表現・創作が理解できない
 ⑧ 自分自身あまり好きでない
 ⑨ 児童がのってくれるかわからない
 ⑩ 児童がどのように動くかわからない
 ⑪ その他（無記入1名を含む）

方がわからない」, 次いで①「授業の流れがわからない」であった。①から④は指導に関すること, ⑤から⑧は自分自身に関すること, ⑨⑩は学習者に関することであり, 指導>自分自身>学習者の順に不安が高くなる傾向にあるが, 有意差はない。

(5) 印象に残った授業内容

図3は, 印象に残った授業内容について回答を得た結果である(複数回答)。典型教材として示したものであり, この結果からは, 「夏のデッサン」と「新聞紙」が高い評価を受けている。いずれも表現領域の内容である。自由記述をみると, 「えつまりだよー」思っても新聞だけでダンスが完成したり, 友達の面白い良いアイデアがあったりしてすごいと思った。柔らか〜い発想が大切だと思う(女子)や「授業でやった『新聞紙』はぜひ実践してみたい」(女子)の感想があり, 「新聞紙を使って体を動かすという方法は単純だけどとても有効な方法だと感じた」(男

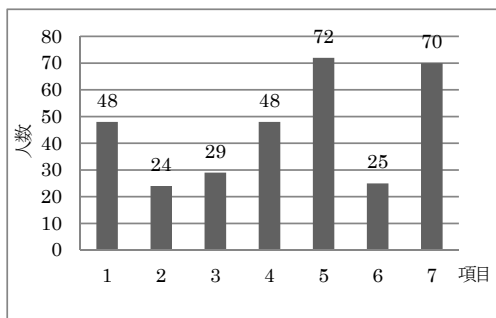


図3. 印象に残った授業内容(典型教材)

- 1: 8 8 4 4 2 2 1 1 1 1 1 1 5: 夏のデッサン
 2: スポーツアラカルト 6: 出会いのダンス
 3: マイムマイム 7: 新聞紙
 4: コロブチカ

子)ことが指導意欲につながっていると考えられる。女子2名は指導を「やってみたい」, 男子は「できればやってみたい」と回答している。

(6) 体得できた指導技術

図4は体得できた指導技術について「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で回答を得たものである。自己評価であるため, 事実上の技能程度とは異なる面もあることを前提に考察すると, 結果からは, ⑥「リズムに乗って動くことができた」と⑦「自分で動いてみせることができた」がわかったことやできるようになったことの上位に上がっていることが示された。授業を通して, 「思ったよりも自分が動けたことに驚いた」(女子)や「少し動けるようになりました」(男子)という実感からくる評価と言える。一方, ④「評価の仕方が理解できた」については自己評価が最も低い。評価は学習目標と表裏一体であるので, この理解が弱いということとは指導に大きく影響してくる。

この自己評価を, 「あてはまらない」から「あて

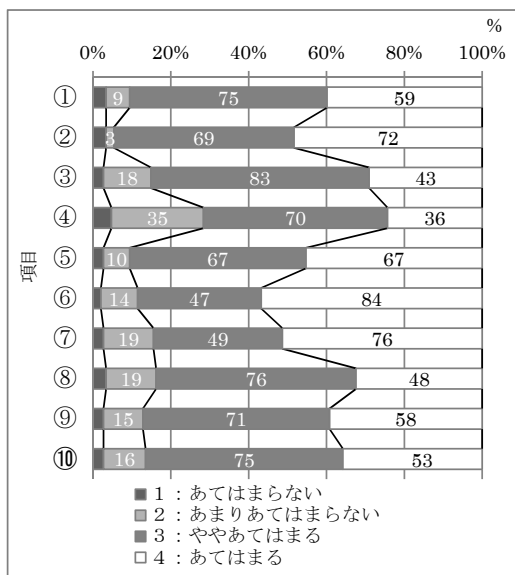


図4. 体得できた指導技術

註: グラフ中数字は実数

【内容】

- ① 1時間の授業の流れが理解できた
 ② 学習内容が理解できた
 ③ 助言の仕方が理解できた
 ④ 評価の仕方が理解できた
 ⑤ 表現・創作について理解できた
 ⑥ リズムに乗って動くことができた
 ⑦ 自分で動いてみせることができた
 ⑧ 動きを多様に工夫する指導法が理解できた
 ⑨ 動きを誇張・強調する指導法が理解できた
 ⑩ 「ひと流れ」の動きにする指導法が理解できた

表3. 指導意欲と自己評価による体得できた指導技術の比較

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
やってみたい	3.526	3.684	3.289	3.105	3.658	3.658	3.579	3.421	3.5	3.5
できればやってみたい	3.164	3.373	3	2.851	3.224	3.448	3.358	3.045	3.164	3.09
あまりやりたくない	3.237	3.737	3.158	2.947	3.263	3.237	3.079	3.026	3.105	3.079
やりたくない	3	3.2	3	2	2.8	3	3	2.8	3.2	3.2

表4. 指導意欲の2群間と自己評価による体得できた指導技術の比較 (*p<0.05)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
肯定群	3.295	3.486	3.105	2.943	3.381	3.524	3.438	3.181	3.286	3.238
否定群	3.209	3.674	3.14	2.837	3.209	3.209	3.07	3	3.116	3.093

はまる」までを1点から4点で得点化して、それぞれの指導意欲の平均をとった(表3)。これをみると、②学習内容の理解以外は、「やってみたい」と回答した学生の自己評価が他に比べて高い。しかし、有意差はでなかったため、「やってみたい」「できればやってみたい」を肯定群、それ以外を否定群として比較したところ(表4)、⑥「リズムに乗って動く」と⑦「自分で動いてみせる」に5%水準で有意差があった。

(7) 自由記述からの考察

授業について、自由記述による感想を121名から得た。その内容からキーワードを抽出すると、最も多かったのが「楽しさ」である(52名, 43%)。そのうち、指導意欲を示した97名中44名(45%)が楽しさの指摘をしている。

また、「いい汗がいた」(男子)、「今までの体育で一番動いたと思う」(女子)、「表現運動でもたくさん運動量を確保することができることがわかった」(男子)と運動量の多さを指摘するものが11名あり、「ダンスをきっかけに話すようになった人もいて交流の輪が広がった」(女子)などの仲間との交流について5名が記している。

指導意欲との関連に着目してみると、「ダンスの授業が必修になる意味があまり分からなかったが子どもたちの表現力を上げたりすることなど他のことでは学べないことが学べると感じた」(女子)と、授業を通して表現運動の意義を感じたことが指導意欲に結びついていることがここでも示唆された。また、「ダンスは踊ることが好きでなかったのが苦手でしたが、誰にでもできることだということが分かったので意識が変わりました」(女子)と、難しいという先入観が指導を敬遠させていることも明らかになった。それは、本授業後にも、「授業は楽しかつ

たが、自分が授業をするとなると自信がない」(女子)と記している学生が4名いることから認識できる。3回の授業の限界であるとも言えよう。

4. まとめ

考察の結果、以下のことが示唆された。

- ・ダンス(表現運動)に対する意識及び指導意欲は授業前よりも授業後の方が有意に高まった。
- ・印象に残った授業内容は、「新聞紙」などの表現領域の典型教材が高い評価を得た。
- ・体得した指導技術についての自己評価は、「リズムに乗って動くことができた」と「自分で動いてみせることができた」が上位にあがり、この2つが指導意欲に関連していると考察された。

学生は、3回の実践であっても、楽しさや教育的意義を実感し、指導意欲が高まることが認められたが、指導技術の明らかな定着や指導における「難しい」という意識の払拭については課題が残った。

本報告は、基盤研究(C)課題番号16K01613の助成による。

引用文献

- 日本教育大学協会保健体育・保健研究部門全国舞踊研究会(1994)大学専門教育改善のための現職教員のダンス指導実践に関する調査研究. 平成3・4・5年度全国舞踊研究会プロジェクト研究報告書. Pp.96.
- 中村恭子(2009)中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—. 順天堂スポーツ健康科学研究1(1)(通巻13):27-39.
- 中村恭子(2010)中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望—東京都公立中学校を対象とした調査から—. 順天堂スポーツ健康科学研究1(4)(通巻16):472-485.
- 村田芳子(2010)表現運動・ダンスにおける学習内容の選定と妥当性の検証. 科学研究費補助金研究(2007~2009)成果報告書.

平成29年3月31日 受理